

Title	マチと夢と銀細工 : チリ先住民伝統医療師の現状
Author(s)	千葉, 泉
Citation	大阪外国語大学論集. 17 p.203-p.230
Issue Date	1997-09-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79736
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「マチと夢と銀細工
— チリ先住民伝統医療師の現状 —」

千 葉 泉

“Machi, el sueño y la platería
— situación actual del chamán mapuche en Chile —”

CHIBA Izumi

RESUMEN

Este artículo trata de la situación actual del “machi”, chamán del mapuche, pueblo nativo residente en el sur de Chile.

Basándose principalmente en una situación vivida por una joven machi de la comunidad Coinco, ubicada en la comuna de Nueva Imperial, se va a analizar algunos elementos tradicionales del chamán mapuche, tanto como algunas situaciones difíciles que viven actualmente los machis.

Se tratará, por una parte, del valor histórico y moderno que implica el “sueño” por ser medio importante en distintas fases de la carrera del machi. También se bosquejará el desarrollo histórico de la platería y el juego de “palín” en cuanto elementos estrechamente ligados al machi.

Por otra parte, se expondrán algunas situaciones modernas que dificultan la consagración y trabajos de los machis contemporáneos: la dificultad de conseguir prendas de plata, que se consideran elementos importantes en la ceremonia curativa del “machitun”, y la fuerte oposición que no pocas veces ponen los familiares a los “futuros” machis, debido a la influencia sistemática de la cultura occidental y la evangelización por parte de la secta evangélica, en desmedro del prestigio del machi dentro de la sociedad mapuche moderna.

De esta forma, se expondrán algunos aspectos de la situación actual que viven los machis, donde ellos se encuentran obligados a buscar un equilibrio entre elementos tradicionales y circunstancias nuevas.

序

地図1 チリ全図

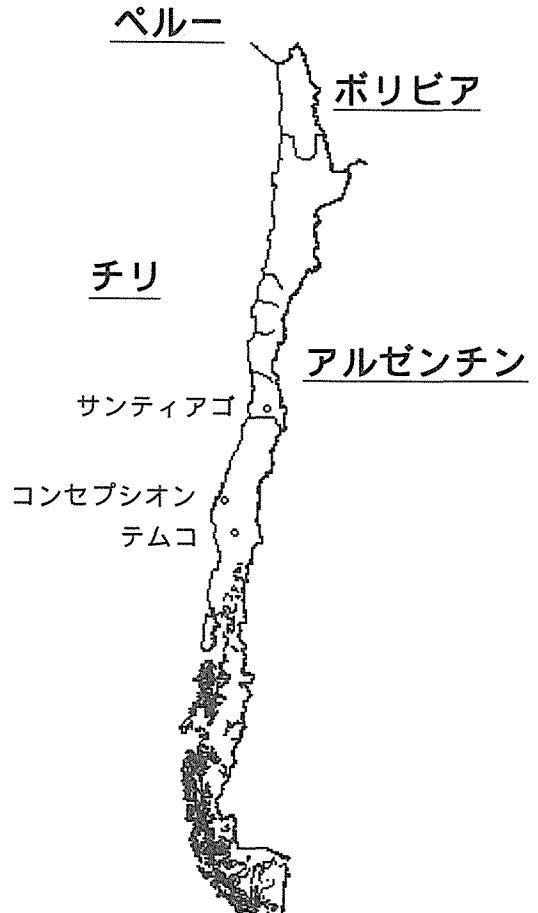
昨年の夏7月下旬から9月初旬にかけて、チリ南部に居住する先住民マプーチェの共同体をいくつか訪れる機会を得た（地図1）。今回の滞在の目的の一つは、現在のマプーチェ社会において重要な宗教的・社会的機能を果たすシャーマンの医療師『マチ machi』の現状を把握することであった。

マチは、薬草に関する豊富な知識と霊的世界との交信能力を用いて疾病の治療を行う医療師だが、今日では治療以外に天候や収穫など共同体全体の安寧に関わる祈願儀礼『ギジャトゥン nguillatun』の場で重要な役割を果たしている場合も少なくない[Chiba]。また、19世紀末の『平定』以降、チリの国家機構への従属を通じて、西欧的文化要素の急速で体系的な流入を経験しつつあるマプーチェ社会において、マチはマプーチェの伝統的な価値観を最も強烈に体现する存在として、その社会的存在意義も高い。

今回の滞在中最初に訪れたヌエバ・インペリアル区のコインコ共同体で、私は全く偶然にある女性マチと知り合い、医療師マチにとって伝統的に重要な要素である『夢』が持つ力を劇的な形で体験することになった。

そして同時に彼女の例を通して、私は現代のマチが直面する様々な困難な問題についても認識することとなった。今日ある人物がマプーチェの民族神である『父なる神』から『マチ』に『指名』され、自らも『マチ』になることを決意しても、マチにとって職業上不可欠な道具類の入手が困難だったり、家族の頑強な反対に合うなど、さまざまな困難を抱えることが少なくない。マチに関する従来の研究は多いが、現代のマチが抱えるこうした問題に焦点を照てたものは少ない。

本稿は、コインコ共同体に住む女性で、『父なる神』から『指名』を受けてマチになる途上にあるクロリンダ・コリピーにまつわる筆者の具体的な体験を中心に、マチと関係の深い『夢』、『銀細工』、伝統的遊戯『パリン palin』などの要素に注目しつつ、近代化が進展するマプーチェ社会の中で、伝統を保持しつつ、新しい状況に適応することを迫られるマチの現状の一端に考察を加えることを目的とする。



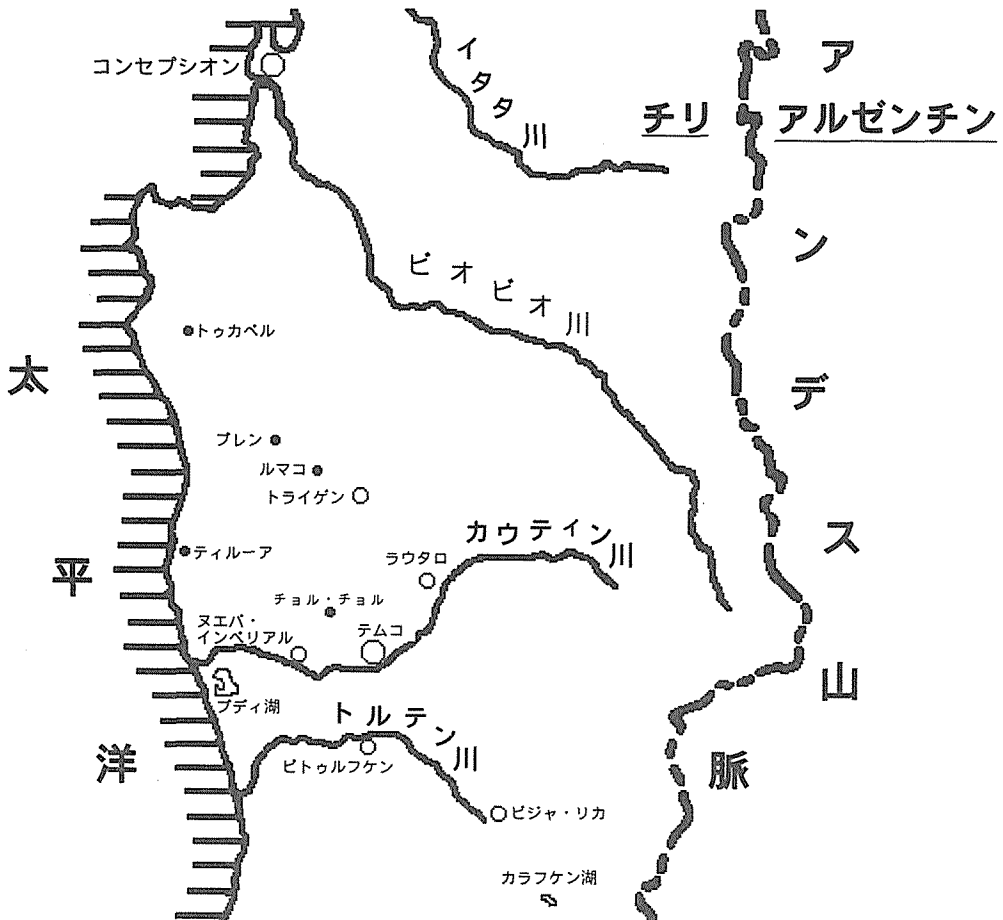
1. コインコ共同体滞在とクララの墓参り

そもそも筆者にとって、コインコ共同体を訪れること自体が計算外であった。

私は4年前に、文部省の在外研究員として10カ月間の間チリを訪れた際、マプーチェの歴史や文化を勉強しているのだから、マプーチェ語を勉強しておいた方がよからうと考えた。そして、受け入れ先のチリ・カトリック大学の先生に紹介してもらったのがクララ・アンティナオ先生であった。

クララは、チリ南部アラウカニア地域の南部に位置する小集落 Cholchol に隣接するピウチェンという共同体出身のマプーチェ女性である(地図2)。現在50才前後の彼女は、15才の時に首都サンティアゴ市に移民し、慣れない都会生活に苦勞しながらスペイン語を覚えた。そして後に、独学でマプーチェ語とマプーチェの伝統工芸である銀細工の教授法を修得し、現在は市内

地図2 チリ南部アラウカニア地域



のある大学の課外授業でマプーチェ語を教えるかたわら、自宅でもマプーチェ語と銀細工を教えている。

滞在中に7カ月間クララの授業でマプーチェ語の初歩を学んだ私は、帰国後もマプーチェ語で手紙やテープをやりとりして友好的関係を保った。そうしたことから、クララは私に一定の信頼を置いてくれたようだ。昨年の夏、サンティアゴで彼女に会ったとき、是非自分の出身共同体に招待したいと言ってきたのである。その時私は既におおよその活動計画を決めてしまっていたのだが、他ならぬクララの招待とあっては断るわけにはいかない。正直なところ、半分「義理」を重んじる形でクララの招待を受けた。しかし今から考えると、クララに心から感謝したい気持ちである。

こうして私はチリ人の妻とともに、彼女の出身地であるピウチェン共同体そのものではなく、クララの姉の一人が嫁いでいる隣のコインコ共同体に数日間滞在することになった。家族内のある事情から、出身共同体の実家には帰りたくないのだとクララはいう。

マプーチェが集中して居住する第9アラウカニア地域の庁都はテムコ市である。そのテムコ市市街の南の外れにあるバス乗り場から、日に2本しかない Cholchol 集落経由のバスに乗り、地元のマプーチェたちとともに2時間ほどバスに揺られ目的地へ着く。我々が滞在することになっていたのは、クララの姉の嫁ぎ先のパンチージョ家の敷地の裏手にある、小さな丘状地の頂に建てられた掘っ建て小屋であった。

「掘っ建て小屋」といっても、『ルーカ ruka』といわれるマプーチェの伝統的な木造建築のことではない。パンチージョ家の親族の者が夏季に訪れた時に過ごすための避暑用に建てられたもので、それは日本の真夏にあたるチリの冬を過ごすにはあまりにも粗末な造りの「正真正銘の掘っ建て小屋」であった。寒さと雨、夜間にテーブルの上を走り回るネズミ、そしてしばらく干されたことのなかった寝具用クッションを絶好の住みかとするノミたちの攻勢に悩まされながら、我々3人は数日間を「掘っ建て小屋」で過ごした。クララもこの『掘っ建て小屋』に泊まるのは始めてで、都市生活の長い彼女はその粗末さにかなりのショックを受けていた。

3日目には、クララの里帰りの目的の一つである両親の墓参りをするため、30分ほどかけて彼女の出身地であるピウチェン共同体まで歩いて行った。もちろん、久しぶりに実家近くまで帰ったのだから、墓参りをするに何ら不思議はない。だが彼女のこの墓参りには、より明確な動機があった。

この共同体の墓は少し前に新しい場所に移転したばかりだった。そしてそのせいか、彼女はあの頃同じ夢を3回も見たのだと言う。その夢には亡き母が現れ、自分の新しい墓の上に赤、青、黄色の3色のリボンをかけて欲しいとクララに頼んだのだという。マプーチェ女性の間には、伝統儀礼などの際に、頭上から背中にかけて色とりどりのリボンを垂らし、銀細工の頭飾りでこれを留めるという習慣がある（写真1）。クララは母親の墓の前に立つと、サンティアゴから持参した3本のリボンを、その上に優しくかけてやった。

こうしたクララの行動の中には、先祖の霊や神などが『夢を通じて』未来の出来事を生きている家族やその他の人物に予言したり、果たすべき義務などを伝達したりするというマプーチェの伝統的な宗教意識が反映されている⁽¹⁾。

だが実のところ、こうしたクララの話の聞いたり行動を見たりした後でも、私はマプーチェにとって『夢』という要素が果たす重要な役割をそれほど明確に認識したわけではなかった。日本でも夢で見たことを縁起に担ぐことがよくあるが、それと同じだろうという程度にしか考えていなかったのである。しかしその後私は、マプーチェ、特にマチにとって『夢』が果たす、より具体的な威力に否応なしに気付かされる事となった。

2. 若きマチ、クロリンダの『夢』

時折降る冬の雨に悩まされながらも、近隣の二つの小学校を訪れたり、コインコ共同体の首長の道案内で、マプーチェの起源に関わる洪水神話に登場する『トレントレン Trentren』⁽²⁾という名前の丘に登ったりして、それなりに充実した時間を我々は過ごした。

しかし、当初6日間滞在する予定だったものの、「掘っ建て小屋」の居心地があまりにも悪いということから、4日目になるとクララは1日切り上げて翌日小屋を引き払うことを提案し、我々もそれに従う他はなかった。

当初からクララが計画していた伝統医療師マチの訪問は結局実現せずじまいであった。彼女が情報を得ていた二人のマチは、いずれも山向こうの場所に住んでおり、冬季の雨とぬかるんだ道の状態の中では、この計画は断念せざるを得なかったのである。

現代マプーチェ社会の中で伝統的な価値観を最も強く保持する人物のタイプであるマチの話を聴くには、マプーチェでありマプーチェ語が堪能なクララがいてくれるということが極めて有利な条件であると考えていた私は、正直なところとても残念な気持ちだった。私にマチを紹介しようと考えていたクララも同じように残念がっていた。

そして最終日の5日目、午後に丘下の道を通るただ一本のバスの時刻に間に合うよう荷づくろいをしていた午前11時頃のことである。突然『マリマリ Mari mari. (こんにちわ)』というマプーチェ語の挨拶とともに、40才位の、清楚で上品な顔つきをしたマプーチェ女性が姿を現した。頭にはスカーフを巻き、『チャマル chamall』というマント型の黒い民族衣装に身を包んでいる。クララもあいさつの言葉を返すと、すぐに彼女を家に招き入れて椅子に座らせ、二人はほぼ100%純粋なマプーチェ語で話し始めた。

最初私は、もうサンティアゴへ帰ってしまうクララに縁者の者でも別れを言いに来たのだろうと思ったのだが、どうも様子が変わる。今回の滞在の最も初期のことで、まだマプーチェ語のヒアリングに慣れていなかった私には、彼女たちが交わす早口のマプーチェ語の会話の内容は、ほんの1～2割程度しかわからなかった。しかし、それでも何か尋常ではない切羽詰まった状況がそ

の女性をここへ来させたことはわかった。

何故なら、「昨晚心臓がドキドキして、何度も目が覚めた」こと、「自分がマチである」こと、「銀細工品がなくて困っている」こと、「銀細工品を作って欲しい」こと等々、断片的にはあるが、彼女の訪問がある具体的な目的によるものであることが把握できたからである。

そして私の心臓にショックが走ったのは、彼女が、銀細工師であるクララの当地滞在を『*peuma*』で知った、と発言した時である。

クララがここへ来ていることを知っているのは彼女の姉夫婦とその息子などごく少数の者だけである。また前述のようにクララ自身、この『掘っ建て小屋』に滞在するのは初めてのことであった。

彼女はサンティアゴに移民してから30年以上もたっているのに、顔つきや服装、そして身のこなしなどにも一般のチリ人と共通するような特徴が備わっている。道で彼女の姿を見かけたマプーチェの何人かも、クララをマプーチェであるとすら思わず、彼女のことを「白人・混血系の年輩の女性」を意味する『*チニューラ* *chínurra*』という言葉で表現しているほどである。要するに、この共同体の中で彼女の姉とごく少数の姻族者の他には、誰も彼女のことを知る者はいなかったのである。白人系の小学校女性教師もトレントレン丘に案内してくれた共同体の首長も、クララとは全くの初対面であった。

だが実は、我々は偶然このマチの息子の一人に会っていた。それは滞在2日目の午後のことである。共同体の小学校を訪問した後、我々は「掘っ建て小屋」に帰るべく近くの坂を登ろうとしていた。丁度その時、同じ坂を登り始めた8～9才位の少年の3人連れがいた。

クララは自分のことを一切説明することなく、いきなりマプーチェ語で彼らに『こんにちわ。元気？お父さん、お母さんは元気？よろしく言ってね。』とあいさつした。と言っても、クララが彼らの両親を知っているわけではなく、全くの初対面である。

今日共同体に住むマプーチェの子供たちの中には、マプーチェ語が完全に理解できて、話す能力があっても、恥ずかしく思って話そうとしない者が多い。マプーチェ語の先生でもある彼女はそのような状況を憂慮し、彼らを励ます目的でいつも意識的にマプーチェ語で子供たちに話しかけるのだという。

するとその3人の中に、流暢なマプーチェ語でクララに答える少年が一人いた。彼らは首都サンティアゴ市にある同じ小学校で学ぶ生徒仲間で、この少年が彼の実家に二人の友人を連れて行く途中であった。そして後でわかったのだが、この少年こそ3日後に我々の「掘っ建て小屋」に到来することになるマチの息子だったのである。

しかし、マチがクララに語ったところによると、この少年が母である彼女に告げたことは、「パンチージョ家のところに女性の訪問者が来ている」こと、そして「その人はマプーチェ語で自分にあいさつしたが、マプーチェではなく『チニューラ』みたいだ」ということだけであったという。実際、私はクララと少年の会話を横で聴いていたのだが、クララは自分の身の上に関わ

る事柄は、一切彼に話してはいない。

つまりマチの息子はクララと知り合っていたが、彼女の名前も職業も、サンティアゴから来たことも知らず、マブーチェであるとすら思っていなかったのである。もし仮にこれらの情報を母親に伝えていたとすれば、マチは何もわざわざ我々が帰る予定ぎりぎりの5日目ではなく、もっと早い時期にクララのもとを訪問していたはずである。

要するに、マチが息子から口伝えて得ていた情報は、「ある外部者の女性がパンチージョ家に滞在している」、ただそれだけの事であった。

ただ、こうした情報が彼女の『夢』を喚起したということはあるかもしれない。いずれにしてもマチは『夢』を通じて、息子に話しかけたパンチージョ家の訪問客が、他ならぬ「銀細工師」であることを知った。しかし、彼女が『夢』で啓示された情報はそれだけではなかった。

私はマチが帰った直後、彼女の発言の内容を出来るだけ忠実にクララにマブーチェ語で再現してもらい、ミニ・ディスクに録音した。そのクララの言葉を見てみよう。

“Feichi machi pepapeeneu peuman pieneu. Trafia peuman akulelngen kiñe rütrafe pieneu. Feichi rütrafe meu peaimi dungu, peaimi kom ta mi dungu ta mi nienun pieneu chi weche wentru. Trafia peuman, küme umautulan, re trepetrepenge kom chi pun pipeeneu. Fei mu ta miaupan fau, eimirke ta mi peafiel. Fei müleparkeimi ta ta. Eimi em kimnielu chi dungu. Iñche rume kutrankaukülen nienun tufachi dungu pieneu, fei meu küpapei chi machi. Peumarkei trafia peumarkeeneu. Ka ta elungerkei ta ñi üi. Elungerkei ñi üi, fei kimniei ñi üi ñi küpan. Trokinwenürke iñchuu, ka familia wenngedy, kiñe mollfün niefuyu kuifi ta iñ fuchakeche yem kiñe mollfün ngekerkefuingün. Feichi dungu mu nga ti miyawu feichi üllcha machi.”

『そのマチは、『夢』（ペウマン）で私を見たって言ったのよ。昨晚、『私のところに銀細工師が連れてこられる夢を見た』ってね。『あんたはその銀細工師のところへ行って検討しなさい。あんたに欠けている全ての品々を見なさい、ってその若者が私に言ったわ。あなたがここに来てるからってね。きのうの晩はそんな夢を見たもんだからよく寝られなくて、一晩中何度も何度もはっと目がさめた。だからあなたに会うためにここに来たの。あなたがここに来てるからっていうのでね。あなたは銀細工のことよく知っているんだもの。わたしこの品々を持ってないからとてもつらい思いをしてるの。』彼女は私にそう言ったのよ。だからあのマチは突然ここにやってきたのよ。前の晩に夢で私を見た。それだけじゃなくて、私の名前も夢の中で告げられていたのよ。私の名前を告げられ、私の名前の由来も知っていたのよ。私たちが同じ家系でもあること、同じ家族に属すること、私たちが同じ血を引くこと、むかし私たちの先祖が一つの血筋だったってこともね。あの若い女性マチは、そんなわけで私たちのところにやって来たのよ。』[Antinao]

(小括弧内筆者補足)

“Rütrafe peuman elungen, kiñe mesa mu, mülei chi rütran mesa, fei mu fei ka peumafin, fei, petu poyengeimi, poyepoyeyengeimi, pengepayalu eimi ka pinggen pi. Epu wentru, epu wecheke wentru puwi ta ñi ruka meu, palipalitumekepui pieneu.”

『机のところにいる銀細工師の『夢』を見たの。銀細工の机があって、その机の所にいる銀細工師の姿もその夢で見たのよ。』って。それで、「あんたはまだ愛されている、とても愛されているんだから（その銀細工師に）見てもらいなさい、とも言われたの」って言ったの。「（そう言ったのは）二人の男で、二人の若い男が私の家に来て、『パリン遊び』をして行った」って、彼女は私にそう言ったのよ。』[Antinao] (小括弧内筆者補足)

原文の中のスペイン語の部分には下線を付してある。また、邦語訳にも対応する部分に下線を付してある。この発言の範囲内では「家族 familia」, 「机 mesa」の二つの名詞のみがスペイン語で、それ以外は完全に純粋なマプーチェ語になっている。クララの証言がこのように純粋なマプーチェ語の形で行われているのは、マプーチェ語の先生である彼女が純粋なマプーチェ語を話すように意識的に心がけているということもあるが、マチ自身が彼女に劣らず極めて純粋なマプーチェ語で話したという事実も反映している。

証言の内容に移ろう。マチが前日の『夢』で、パンチージョ家への訪問客として来ているのが銀細工師であることを知ったということは既に述べた。だが、彼女はそれだけではなく、クララの名前が何であるかも、そしてさらに二人の家系が遠い親戚にあたるということも『夢』を通じて知った、と語ったのである。

まず名前について言えば、マチはクララの名前を知っただけではなく、偶然にも（いや、偶然ではないのかも知れないが）二人は同名だったのである。マチの名前はクロリンダ・コリピーである。クララとクロリンダでは名前が違うではないか、と思われるかも知れないが、クララというのはクロリンダの愛称であり、区役所にはクロリンダという名前で届けられているという。

一方、マチの姓はコリピーである。コリピーといえは、もともとブレン地区に住んでいた有力な一族である。19世紀初頭、チリでスペインからの独立戦争が起こった時に、当時コリピー家の当主であったファン・コリピーは、早い時期から独立派のクリオーリョの軍隊に加勢して王党派のスペイン人兵士や同派のマプーチェたちと戦った人物である⁽³⁾。そして独立以降も19世紀を通じて、コリピーの血を引く者たちは、近隣地域のマプーチェに大きな政治的影響力を及ぼし続けた。

私は前回のチリ滞在時に、クララの母方祖母がコリピーの姓を持つこと、すなわちコリピーの血筋を引くことを彼女から聞いて知っていた。確かにこのマチはクララの遠い親戚にあたるので

ある。さすがに私もこれには驚いた。そして、親戚にマチがいることを知ったクララの驚きは、私のそれに劣らぬものがあった。

一体ここまで偶然が重なるということがあり得るのだろうか。しかも、こうしたこと全てをマチは『夢』で知ったというのである。上で述べたように、パンチージョ家の訪問客であるということ以外、クララが何者であるかをマチが何らかの客観的な手段を通じて知っていたという可能性は極めて少ない。また仮に、夢で知ったとでっち上げてクララに告げたところで、それによってマチが何らかの物質的利益を得るとも考えられない。

それでは、日本から来た研究者である私に都合のいい（「売れる」、あるいは「学術的な興味を引く」）情報を人為的に提供することによって、何らかの経済的報酬を要求しようとしていたのではないか、と思われるかもしれない。だが、こうした憶測は全く見当外れである。なぜなら彼女は『掘っ建て小屋』にいた約1時間半の間、ずっとクララと話しっ放しであり、私の方は一度も見ようとすらしなかった。スペイン語で話すことも一切なかった。要するに私の存在などは全く眼中になかったのである。

しかし、まさにこうした状況ゆえに、私は極めて自然な形でマチにとって『夢』が果たす役割の一面を具体的に体験することができたし、西欧化の進展する現在のマプーチェ社会の中で、マチが抱える困難な状況を示唆するいくつかの事実も認識することができた。

3. マチと『夢』

マプーチェの伝統医療師や夢に関する情報は古く、イエズス会士のルイス・デ・バルディビア神父が先住民を改宗させる目的で執筆し、1606年にリマで刊行されたマプーチェ語とスペイン語の2言語による告解書の中に既に見られる。同書の「神への信仰」に関わる「第1の戒律」にちなんだ12の質問の中には、次のようなものが含まれている。

『4. 邪術師に病気の治療をさせたことはあるか。病気にかかって邪術師を呼ぶか、呼びに行かせたことはあるか。』

『5. その場合、邪術師に何をしよう指示されたか。そして実際に何をしたか。』

『9. 自分の見た夢を信じたことはあるか。また他人に自分の夢を語らせ、それを信じたことはあるか。』 [Valdivia: f.5v.]

まず第4と第5の質問から、既にこの時代に今日のマチにあたる医療師が存在していたこと、そしてキリスト教の布教を目指す神父にとって、彼らが『悪魔』と通じる『邪術師 Hechizero』という警戒すべき存在として認識されていたことがわかる。

そして第9の質問から、当時からマプーチェたちが、『夢』を現実的な意味を帯びた要素とし

で重要視していたことがわかる。この質問では、『夢』が特に医療師に結びつけられているわけではないが、イエズス会士が『邪術師』と呼ぶ彼らにとって、少なくとも一般のマプーチェと同程度、あるいはそれ以上に『夢』が重要な役割を果たしていたと考えるのは不自然ではないだろう。

マプーチェたちが『夢』で見た出来事を実際に起こる事柄の予兆と見なすという主旨の叙述は、同世紀後半に執筆されたロサレス神父の記録にも見られる [Rosales, I: 157]。

今世紀の初頭にカプチーノ会修道士のアウグスタ神父が採集したマプーチェ語による民族誌的記録の中には、家畜の増産や豊作を祈願して行われる祈願儀礼『ギジャトゥン nguillatun』の執行において『夢』が果たす役割を示唆する証言が載っている。それによれば、女性、特に女性のマチが見る『夢』の中に神格的存在が現れ、『ギジャトゥン』の実施を要求するということが、同儀礼を執行するための契機となっていたという [Augusta: 6]。

そして、より具体的にマチが行う治療行為の中で『夢』が果たす役割については、19世紀初頭にアンデス山脈地域に居住するマプーチェ集団パウエンチェスの間で見聞を行ったルイス・デ・ラ・クルス隊長の記録に見られる。デ・ラ・クルスによれば、薬草療法や切開療法などで病気が治癒しなかった場合、マチは『夢』を通じて霊的治療の段階に移行すべき時期を判断していたという [de la Cruz: 45-46]。

さらに今世紀初頭に海岸部のブディ地区に住むあるマチの兄弟が残した証言によれば、『神』は自分がマチに『指名』した者の『夢』に現れ、治療儀礼に有効な馬、牛、ナイフ、葦の棒などの要素をシンボリックな形で付与すると考えられていた [Coña: 334]。

今日のマチにとっても、『夢 peuman』は極めて重要な要素である。現代のマプーチェにとって最も重要な神格は『父なる神 Chau Dios』⁽⁴⁾だが、そもそもこの『父なる神』がある人物をマチに『指名』する重要な手段の一つは『夢』である。『神』や『神の使者』が夢に現れ、『マチになるように告げた』、という類のマチの証言は今世紀の初頭以降に書かれた多くの民族誌研究に見られるが、今日のマチにも共通するものとなっている。

また、正式なマチになった後も、『夢』は彼らにとって職業上極めて重要な要素であり続ける。ある種の疾病に効果のある薬草の名前、形状、育成地、処方法など、極めて具体的な情報に至るまで『夢』を通じて『神』から伝達されると述べるマチも少なくない。

チオルチオル集落に近接するロムルウエ共同体に住む67才の女性マチ、ロサ・カユルは、処方上の知識が通常の形で、つまり経験的に伝達されるタイプの薬草と、そうした知識が『夢』の中で伝授されるタイプの薬草とを区別し、前者を『ただの薬草 re lawen』、そして後者を『夢薬草 peuman lawen』と呼んでいる [Rosa, No.2]。またロサは、ある男性の患者が到来する前日の夜に夢を見、その患者の病状や処方すべき薬草に関する具体的な知識を伝達され、それに従って治癒した、という経験を筆者に語っている [Rosa, No.1]。

このように、『夢』という要素はマチにとって極めて実践的・具体的な機能を果たす要素であ

ることがわかる。既に見たように、クロリンダも『夢』を通じて極めて具体的な情報を獲得していた。そして、この情報の具体性と関連して、彼女がクララのもとを訪れたのには極めて実践的な動機があった。

彼女は数年前に、『夢』と『幻影 perimontun』を通じて『神』からマチに『指名』されていた。しかし、正式なマチとして働き始めることを困難にするいくつかの要因が彼女を悩ませていた。その一つが、他ならぬ銀細工の問題であった。なぜなら、マプーチェの伝統民芸である銀細工の品々(写真2, 3)は、ある人物が正式なマチとして働くために必要不可欠な要素の一つであるからである。

そこで、次に銀細工が今日のマチについて持つ意味について考察しよう。

3. マチと『銀細工』

今日一般にマプーチェの代表的な伝統民芸と考えられている銀細工は、スペイン人到来以前のマプーチェ社会においては、決して重要な要素ではなかったようである。つまり銀細工は、むしろスペイン人の嗜好の影響を受けた後に始めてマプーチェ社会で盛んになったという性格が強いのである。

こうした事情を示唆する言語上の事実がある。今日「銀細工を作る」という動詞の不定詞形であり、「銀細工」という抽象名詞にもなるマプーチェ語は“rütran”だが、この言葉の本来の意味は銀細工だけではなく、鉄などを含む「鍛冶一般」を指す。それに対し、「銀」とか「銀細工」という、より限定された意味のマプーチェ語は存在しない。「銀」と特定している場合にはしばしば“pülatá”という言葉を使うが、これは「銀」を意味するスペイン語の名詞“plata”が、“pl”という二重子音を持たないマプーチェ語の音韻的特徴の影響を受けて変容したものである。

こうした事実も示唆するように、チリのマプーチェの間で銀細工が普及するのは、むしろスペイン人の到来以降、特に18世紀末以降のことであったと考えられる [Aldunate: 1]。

征服時代の16世紀中葉に、チリの征服者ペドロ・デ・バルディビアに同行してチリ征服に参加した兵士ビバルが書いた記録(1558年執筆完了)によれば、銀製の腕輪など、マプーチェ女性が身につけていた銀装飾品が全くなかったわけではないものの、その他に金の腕輪、「トルコ石」と金板を合わせて作った胸飾り、銅製の耳飾りなど彼らの装飾品は多様であり⁽⁵⁾、銀細工の相対的な重要性は決して高いものではなかった。

17世紀初頭に反乱マプーチェとの戦いの最前線で活動したゴンサレス・デ・ナヘラ隊長の記録には、当時のマプーチェの装飾の特徴が記述されている。彼は、当時のマプーチェは金も銀も珍重せず、スペイン人都市を襲撃した際に金銀の板や延べ棒を手に入れていたものの⁽⁶⁾、その主な用途は植民地側に捕虜になっている親戚を解放させるための代金として支払うことであったと述べている [González de Nájera: 45-46]。

それに対し、17世紀初頭当時、彼らが最も珍重する装飾品は、『ジャンカ llanka』という緑色の石を使った首飾りであった [Ibid.: 47]。『ジャンカ』は、ビバルの言う「トルコ石」にあたるものであろう。

ただゴンサレス・デ・ナヘラは、女性の中には、やはりスペイン人の都市を襲撃した時に獲得した銀製の聖杯を加工して作った耳飾りを着用するものもいると述べている [Ibid.: 47]。同世紀後半に執筆されたロサレス神父の記録でも、銀製の女性装飾品として挙げられているのは耳飾りだけである [Rosales, I: 152]。

要するに、この時期の銀細工の主な用途は捕虜交換の手段であり、主要な入手法も戦利品という偶発的なものに過ぎなかった。銀製の装飾品が全く使われなかったわけではないが、装飾品全体の中でそれが占める位置は決して高いものではなく、種類もごく少数の品に限られていたのである。

このように、17世紀までの段階では副次的な重要性しか持たなかった銀製の品々が、マプーチェの間で最も重要な装飾品として高度な発達を遂げるには、やはりイスパノクリオーリョ系人口からの影響によるところが大きかったものと思われる。

17世紀後半に書かれたイエズス会士のロサレス神父の記録には、17世紀初頭のマプーチェ大反乱の際に捕虜になり、それ以来数十年にわたってマプーチェの間で捕虜として生活していたフランシスコ・デ・アルメンダラスというスペイン人隊長のことが記録されている。隊長は捕虜になった後、生計を立てるために鍛冶職となった。そして、その職能によって地域のマプーチェたちの親愛の情をかちとり、彼らと同じように多くの先住民妻を娶ったという [Rosales, II: 1130]。

このように反乱マプーチェ集団の間で生活していたスペイン人やクリオーリョの捕虜や軍からの脱走者、あるいは逃亡犯罪者たちなどが、鍛冶の技術を生かして、既に17世紀前半の段階で彼らのために「銀」の装飾品を作り始めていた可能性も高い。上に述べたように17世紀の初頭にマプーチェ女性たちが身につけていた聖杯から作った銀製耳飾りの類も、マプーチェの間で暮らすこうしたイスパノクリオーリョたちが加工したものかも知れない。

一方、反乱地域のマプーチェを懐柔して王室の影響力を増す目的で王室官僚が恒常的に実施していた贈与の習慣も、マプーチェの間での銀細工品に対する評価の拡大と普及に一役買った可能性は高い。

植民地当局と反乱マプーチェ集団との間での始めての大規模な和平である「キジンの和平」が開催される前年の1640年、当時の総督は、和平の呼びかけに応じたインペリアル地区のカシーケとその息子にそれぞれ「銀の輪」をはめた『総督および総監の杖』、『サルヘント・マヨールの杖』を、そしてマケウア地区のカシーケには同じく『連隊長の杖』を付与している [Rosales, I: 1124]。

このように、友好的なカシーケに対し、地域の先住民に対する統治権を付与すると同時に、王権への従属を象徴的な形で認めさせる目的で、銀の輪や柄をはめ込んだ杖を「下賜」とするという習慣は、植民地における王権の拡張をめざす18世紀のブルボン朝の統治期にはより大規模な形で

実施された。そして、「和平」を維持するためにはほぼ定期的に開かれる「交渉 parlamento」の場では、各地からはせ参じた100名を超すカシーケたちに対して、銀をあしらった杖が1本ずつ付与されていた [Méndez: 164-167]。

こうした杖が、カシーケの権威の象徴として植民地当局から定期的な形で下賜されていたことが、マプーチェの間で銀という素材に対する社会的威信のシンボルとしての価値を増加させることに一役買ったであろうことは想像に難くない。

おそらく、こうした様々な側面におけるイスパノクリオーリョ人口側からの影響で、遅くとも18世紀の末にはマプーチェの間で銀装飾品はかなり普及し、多様化していた。

イエズス会士のモリーナ神父は、1776年に著した記録の中でマプーチェ女性の装飾に言及している。神父によれば、当時マプーチェ女性の間では多様な銀製の装飾品が使われていた。例えばマントや上着を結び留めるための銀製のベルトやブローチといった品々は、既に定式の民族装飾の地位を確立していた。その他、17世紀初頭から使われていた耳飾りはもちろんのこと、10本の指全てにはめられていたという指輪の大部分も銀製のもので、「どんなに貧しい女性でも銀製の装飾品を身につけないものはいない」と神父は述べている [Molina: 148]。

こうした需要の拡大を反映して、19世紀に未だ独立的性格を保持するビオビオ川以南のマプーチェの居住領域に入り込んで商売をしていたイスパノクリオーリョ系の商人たちにとって、主要な商品の材料は「銀貨」であった。つまり、銀貨を鍛えて薄い板に伸ばしたものを加工して様々な銀製品を作らせ、マプーチェの顧客に商品として提供していたのである。

19世紀中葉にチリに滞在した米国人天文技師スミスが商人を装ってマプーチェ居住領域を旅行したのは1853年のことであった。その旅の回想の中でスミスは、マプーチェとの交易の主要な商品である銀細工の品々を作る目的で大量の銀貨が消費されるために、南部フロンティア地域全域で貨幣不足が生じていた、と述べている [Smith: 94]。

またスミスは、ビオビオ川の南岸に比較的近いチュマルコ川という小川の近くに住んでいた先住民の銀細工師に言及し、この人物がマプーチェやイスパノクリオーリョの商人などの顧客のためにさまざまな銀細工品を製作していたと記している [Ibid.: 93]。

19世紀になると、銀の用途は女性の装飾品にとどまらず、男性の間でも銀細工の愛好が普及していた。スペイン人に対する長期の抵抗の過程で馬を同化し、頑強な騎馬民族と化していたマプーチェだが、この時期マプーチェの男たちの間では、愛馬につける拍車も初期に使われていた鉄製のものに代わって銀製の拍車を使用することが一般化していた⁽⁷⁾。また、こうした銀製の拍車は、一夫多妻制を習慣とするマプーチェの男たちが嫁を迎えるための重要な婚資の一つにもなっていた [Ibid.: 125]。

上で触れた先住民細工師の他に、ヨーロッパ系住民の中にもマプーチェの領域内に定住し、特定のカシーケのために独自のスタイルの多様な銀細工の品々を作製するお抱えの職人が各地に出現していた。

スミスの旅行の数年後の1859年に、アラウカニアの南部を中心にマプーチェ居住地域を訪問したドイツ人のトロイラーは、ビジャ・リカ近辺の地区のカシーケ、マリナオの領域内に住む『チリ人 chileno』の銀細工師と知り合った。この人物はマリナオの娘と結婚して同地に定住し、先住民の顧客たちが提供する「銀貨」を材料にして、馬具や女性用装飾品を作っていた [Treutler: 356]。

また、筆者が知り合ったマチのクロリンダやクララの親戚に当たるコリピー家の家族史に関する証言を、一族の血を引くロレンソ・コリマンが今世紀の初頭に残しているが、それによれば、19世紀前半当時、プレンに居を構えたコリピー家の当主であったロレンソも、お抱えの銀細工師を自分の領域内に住まわせ、妻たちが身につける装飾品を作らせていたという [Guevara: 17]。

つまり、すでに『平定』直前の19世紀中葉には、銀細工の品々は女性の装飾、馬具などマプーチェの社会生活に関わるさまざまな側面で重要な位置を占めるようになり、こうした製品を作る専門の職人も各地に存在していたことがわかる。

だが銀細工の品々は、こうした単なるお洒落、あるいは社会的威信や富のシンボルといった世俗的な機能にとどまらず、宗教的な価値も備えるようになった。

19世紀中葉にアラウカニア南部を旅行したドイツ人のトロイラーは、ピトゥルフケン地区に住むマチが行う治療儀礼『マチトゥン machitun』に参加した際、女性たちが過度なまでにありとあらゆる銀装飾品に身を包んでこの儀礼に出席する様子を目撃している [Treutler: 401]。

また『平定』直後の今世紀初頭、海岸部ブディ地区のカシーケであったコーニャの証言によると、同地のマプーチェ女性たちは、祈願儀礼「ギジャトゥン nguillatun」に、やはり全身を多様な銀細工品で飾って出席していた [Coña: 375]。一方、銀製の馬具で飾り立てた馬に乗り、同儀礼に参加していた男性の騎士たちは、この儀礼の中で豊作を祈願し悪霊を追い祓うため、『アウン awün』と呼ばれる馬の疾走を行っていた [Coña: 376]。

ここで、マプーチェの間で銀細工の嗜好が定着していくプロセスをまとめておこう。

第一に、銀細工は16世紀中葉のスペイン人到来期のマプーチェの間では初歩的な段階にとどまっており、種類も用途も限られていた。

第二に、それ以降ヨーロッパ人との接触の過程で女性の装飾品や馬具など多様な銀装飾品の使用が普及して行き、専門の銀細工職人の出現とともにマプーチェ独自の民族工芸に発展していった。

第三に、身だしなみや社会的威信といった世俗的な機能のみならず、遅くとも19世紀の中頃までには、銀細工の品々が宗教的な場にも適合する要素として認識されるようになっていた。

さらに、今世紀初頭にはシャーマンの医療師であるマチにとって、銀細工が職業上極めて重要な意味を持つ要素になっていたことを明確に示す記録がある。それは前述の、海岸部ブディ地区に住むあるマチの兄弟がマプーチェ語で語った証言である。それによれば当時同地区の年長のマチたちは、これからマチになろうとする娘のために、マチを『指名』する存在と考えられていた

『父なる神 Chau Dios』に対し、次のように祈禱していた。

“Küme elafimi tüfachi pichi domo; eimi machilafimi, eimi mi duam küme machiñeai, chau dios, wenumapu mëleimi, anüleimi tami tutelü mesa meu, rañi plata mëleimi ... [Coña: 334]

『この娘をいいマチに仕立てて下さい。あなたが彼女をマチにするのです。あなたの意志によってこの娘はよいマチになることでしょう。『父なる神』よ、あなたは天界におられます。あなたは美しい机の所に座っておられます。銀に囲まれておられます。・・・』(下線筆者)

また治療の際には、既に亡くなったマチたちの霊が、守護霊として治療を行おうとするマチを援護すると考えられていたが、マチはそれらの守護霊や『父なる神』に対し、次のように祈禱していた。

“Eimn kam nielaimn tamn newen kewapeyüm? - Malofe machi ñeimn; kom iñchiñ feleiñ, taiñ femkënoeteu taiñ chau, füchapei; taiñ ñuke, kushapei, mëlei wenumapu meu.

“Fei mai elueneu fill kümeke dëgu, ñi lawentuafiel kutranchi che; “eimn moñelafimn laiachi ché”, pieneu chau dios, anülei wenumapu meu tañi tutelü plata mesa meu; taiñ elkeeteu, elcheñe ñei.” [Coña: 360]

『(マチ霊たちに対して) あなたがたには戦うための力がないというのですか。私たちは勇敢に戦うマチなのです。我々にこの能力をお与えになったのは、天におられる老いた「我々の父」、そして老いた「我々の母」なのです。「父」が、そして「母」が、病気の者を薬草で治癒するために、我々にあらゆる有り難い知識を授けて下さったのです。父なる神は「お前たちは、瀕死の病人を治すように」と言われました。父なる神は天界に座っておいでです。美しい銀の机に座っておいでです。我々をマチになされ、人をお造りになったのです。』(下線、小括弧内補足、カギ括弧筆者)

下線部の内容から、当時ブディ地区のマチたちが、自分たちをマチに『指名』した『父なる神』は天界におり、「銀細工の品々に身を包み」、「銀の机に座っている」と認識していたことがわかる。

さらに『父なる神』は自分がマチに『指名』した少女に対しても、次の証言に見られるような指示を出していた。

“Wenumapu ñemen ñi peuma, fei meu fill kúmeke dëpu meu elueneu; “machiğeaimi”, pieneu, “rañi plata ñillatuñmaiaen”. Ülerüqeneu feichi wenumapu kiñe tutelu wentru. Ñi peuma eluñen fill lawen; rañi lawen witrantëkunieeneu; fei meu përuleneu pu lawen ñi peuma”. [Coña: 340]

『私は夢の中で天界へ行きました。そこであらゆる役に立つ能力を（「父なる神」は）私に与えて下さったのです。『お前はマチになりなさい』と、『銀に囲まれて私に祈りなさい』と私に言われました。その天界で、一人の美しい男が私の体をこすりました。また、夢の中で私はあらゆる薬草を与えられました。そしてそれらの薬草の上に私は置かれました。すると夢の中で薬草たちが私に踊って見せたのです。』（下線、小括弧内補足筆者）

つまり、マチに治療に関わる様々な知識を与えてくれる『父なる神』は、マチが治療を行う際に、『銀細工の品々に身を包んで祈禱を行うように』と指示しているのである。

一方、マチのシンボルであり、治療に際してマチを援護する霊の到来場所と考えられている『レウエ rewé』と呼ばれる階段上の木彫りがある。新しいマチはイニシエーションの儀式の最中に自宅の前に新しいレウエを建てるのだが、そのレウエを埋めるために開けた穴の中にも1ペソあるいはより少額の「銀貨を埋める」、と同証言者は述べている [Coña: 342]。

以上の証言から、今世紀初頭当時ブディ地区のマチたちにとり銀細工の品々が、『父なる神』と密接に関連すると同時に、自分たちの行う治療が効力を持つように『神』に祈願するためにも必要不可欠な要素である、と認識していたことがわかる。

ヨーロッパ系住民の影響を受けて始めて本格的に発達したという性格の強い銀細工だが、どんなに遅くとも今世紀の初頭には、少なくとも一部の地域のマプーチェたちの治療儀礼において、極めて重要な要素と見なされるようになっていたのである。

コインコ共同体に比較的近いロムルウエ共同体の女性マチ、ロサ・カユルは筆者に対して行った証言の中で、少なくとも2名の患者の治療過程で見た夢の中で、『神』が「銀細工の品を治療に使うように」と彼女に指示したことを示唆している [Rosa, No.1]。

コインコ共同体の新米マチ、正確に言えばマチに『指名』されいながら、未だに正式なマチとなるためのお披露目の儀式を済ませていないクロリンドがあれば銀細工にこだわったのも、単にマプーチェの伝統的装飾だからという形式的な理由だけではなく、それらの品々が自分をマチに『指名』した『神』の意志に、そしてマチという職の効力そのものに密接に関係する要素であると認識されていたからに他ならない。

4. マチと『バリン』

さて、クロリンダの証言にはもう一つ興味深い要素があった。遊戯『パリン palin』である。前述のように、クロリンダが見た夢の中で彼女にクララの滞在を告げたのは、『パリン遊び』をする二人の若い男性であった。

『パリン』というのはマプーチェの間で行われてきた伝統的なスポーツ遊戯で、すでに16世紀中葉、チリ征服に参加した兵士ビバルの記録にも、『チュエカ chueca』というスペイン語名とともに記されている [Vivar: 267]。

17世紀後半の記録者であるイエズス会のロサレス神父のクロニカには、『チュエカ』の具体的な遊び方が説明されている。同数の遊技者が二チームに分かれ、各遊技者は先端が歪曲した木製のスティックを持つ。そして両チームが木製の玉を打って戦い、玉が相手の陣地に引かれたラインを超せば1点となる。そしてどちらかのチームが4点あるいは6点獲得すれば決着が着く [Rosales, I: 160-161] (写真4)。なお、今日でも『パリン』は基本的にはロサレスの叙述と同じ形で行われている (写真5, 6)。

要するに『パリン』とは、形態的に言えば「マプーチェ式ホッケー」である。だが、我々がよく知っているヨーロッパのホッケーと異なるのは、この遊戯がマプーチェ社会にとって、歴史的に単なるスポーツ遊戯の域を超える様々な機能を果たしてきたことである。

第一に、軍事訓練的な機能が挙げられる。ロサレス神父によれば、17世紀当時スペイン人との間で戦闘を維持していたマプーチェの戦士たちは、激しい動きを伴うチュエカの競技によって体を鍛え、戦闘に備えていたという [Ibid.: 161]。

第二に、政治的な側面でもパリンは重要な機能を果たしていた。同じくロサレス神父の記録によれば、マプーチェたちはしばしば、複数の地区の住民が一堂に会するチュエカの試合の場を利用してスペイン人の支配に対する反乱の計画を練り、これを実行に移していた。そして、こうした理由から、チリ植民地の最高行政官である総督は、平定された地域に住むマプーチェたちがチュエカを行うことを禁止していたとある [Ibid.: 161]。また、ほぼ1世紀後 (1767年) にやはりイエズス会士であるオリバレス神父が執筆した記録にも、同様の叙述が見られる [Olivares: 43]。

第三に、パリンの決定手段としての機能が挙げられる。地域の住民にとって重要な事項の決定を『パリン』の結果に委ねるということがしばしば行われてきたのである。例えば1845年にアラウカニアを旅行したポーランド人の科学者ドメイコは、捕虜となった司教の扱いをめぐるブレンおよびムルチェンとティルーアという2地区のマプーチェたちの間で行われた18世紀のパリンの例や、トゥカペル地区における布教所再建の是非をめぐる行われた同時代のパリンの例に言及している [Domeyko: 671, 698]。また1853年にアラウカニアを旅行した米国人のスミスも、マプーチェの間における『チュエカ』愛好に触れ、「政治に関わる重要な事項が、一度ならず『パリカン』の試合で決定されてきた」、といささか軽蔑を込めて記している [Smith: 229]。

このように、パリンは過去のマプーチェにとって世俗的な側面で様々な機能を果たしてきたことがわかる。

だが、それと同時にパリンは宗教的・霊的な特徴も兼ね備えていた。

既に17世紀のロサレス神父の記録には、マプーチェのチュエカ選手たちが「木の玉が自分たちの有利な具合に動くように、いろいろな形で悪魔に祈念」していた、とある [Rosales, I: 161]。今世紀の初頭にアウグスタ神父が採録した証言にも、『パリン』の試合の前日に選手たちが木の玉に祈念したり、翌日の試合の結果を『青い娘 kallfü mal'en』と呼ばれる女性に『夢』で占わせていたことを示す叙述が見られる [Augusta: 332]。

さらに、少なくとも現代の『パリン』に関して言えば、この遊戯がさまざまな形で宗教的な要素や儀礼に関連し、「聖なる遊戯」として認識されていることがわかる。

第一に、『パリン』は祈願儀礼『ギジャトゥン nguillatun』と密接に結びついてきた。米国人の文化人類学者ティティエフは、1948年にチオルチオル集落近辺に位置するコイグエ共同体で開催されたギジャトゥン儀礼の最中に、短い『パリン』の試合が行われたことを指摘している [Titiev: 135]。また筆者も、1997年8月にルマコ区を訪れた際、ある共同体の若者たちが、まさにギジャトゥンを行うその場所で『パリン』の練習を行うのを見た。このように、ギジャトゥンを行う儀礼場がパリンの試合場と一致しているケースも少なくない。

第二に、『パリン』はマチと深く関わっている。各地のマプーチェたちの証言によれば、少なくともほんの20～30年程前までは、各地で行われるパリンの試合にマチが参加することが常であった。何故なら、各チームには試合の際にそれぞれの地区のマチが同伴し、自地区のチームのゴールの方へ玉が引き寄せられるようにそれぞれの守護霊に対して祈念を行っていたからである⁽⁸⁾。

そして最後に、具体的にマチが行う治療儀礼と『パリン』との関係について見てみよう。

1960年代頃から共同体のマプーチェの間にも急速に浸透したサッカーの影響で、今日「遊戯としてのパリン」がすたれてしまった地域も少なくない。しかしマチの治療儀礼の場では、各地で『パリン』が極めて重要な役割を果たし続けている。

前述の、今世紀初頭に書かれた海岸部ブディ地区のマプーチェの証言によれば、マチが行う治療儀礼『マチトゥン machitun』の際に、『パリン』に使われるスティック (wiño) をカンカンカンと叩き合うことが、病因である悪霊を祓うために有効な手段の一つと考えられていた [Coña: 360]。

これと同じ目的でのスティックの使用は、今日各地で行われているマチトゥンにも引き継がれている。箭内は、1991年から92年にかけてカラフケン湖地区で行った現地調査に基づき、同地区のマチトゥンにおける「パリンの棒」の打ち鳴らしに言及している [箭内: 589]。

筆者が1996年の8月に参加することを許されたルマコ区ピリルマブ共同体のマチトゥンでも、憑霊前のマチの頭上や横たわる患者の体の上で、参加者の男性たちが手にしたスティックや葦の棒を打ち合うという儀礼が数度行われた(写真7, 8)。この治療を行ったマチ、エウダリア・ライマンは、スティックの連打は、自分の魂を援護するために行われると証言している [Raimán]。

このように、悪霊を祓ったりマチや病人の霊を援護する目的で使用されるパリンのスティック

は、マチの家では普段から、マチが天界の霊と交信するのに不可欠な木彫り階段『レウェ』の近くに置かれている（写真9）。

以上述べてきたように、一見単なるスポーツ的遊戯と見える『パリン』競技だが、過去のマプーチェたちにとっては軍事・政治・社会にわたる多様な機能を、そして今日のマプーチェにとっては、少なくとも宗教的な側面で重要な機能を果たしている。そして特にマチにとっては、『パリン』のスティックは、彼らの職能を遺憾なく発揮するために不可欠な要素の一つとして認識されている。

したがって、「マチであるクロリンダに朗報を伝える人物」が「パリン遊びをする若者」であったという事実は、決して偶発的な事象ではなく、むしろクロリンダのマチとしての伝統的な感受性の一端を如実に示す出来事であったといえるだろう。

5. 現代のマチが抱える困難な状況

ところで、クロリンダは「銀細工の品々を持っていないのでつらい思いをしている」という内容の発言をしている。この「つらい思い」というのは、単に、『夢』を通じて伝達された『マチ指名』という『父なる神』の意志を彼女が果たせないことによる精神的葛藤を意味するのではない。今回の滞在中に私が直接対話することのできた5名のマチの全員が、『指名』から正式なマチになるまでの期間、体が麻痺状態になって歩行困難に陥るなど、重度の慢性的疾病を経験している。彼女たちはこうした病的状態を、『指名』された者が早く正式なマチになるように神が及ぼす意志の表れであると考えている。

神格的存在からの『指名』によってシャーマン候補者が経験する病的状態は、マプーチェの医療師であるマチに限られるものではない。こうした現象は日本の沖縄・奄美の『ユタ』を初めとする世界各地のシャーマンに共通する現象で、日本語では『巫病』と呼ばれている[佐々木: 7-8, 15-16]。

ところで第3章で見たように、マチとして職能を発揮していくためには銀細工の品々が職業上不可欠な要素であると認識されている。それ以外にも、太鼓・笛・鈴など、治療儀礼に欠かせない楽器の類もある。

しかしながら、以下に述べるように、今日マチがこれらの品々を手に入れることは次第に困難になってきている。つまり、クロリンダの例を見てもわかるように、『神』の意志に意識的に反抗しようというつもりはないにもかかわらず、生活条件の変化によって結果的に『神』に逆らわざるを得ないような状況が生まれているのである。

こうした生活条件の変化の一因は、19世紀末の『平定』後、マプーチェたちが数家族ごとに狭い居留区（共同体）の中で生活することを余儀なくされると、伝統的な民具を作る職人が各地で消滅していったことにある。

この問題を銀細工民芸について見てみよう。『平定』後、世代を経るに従って共同体内部の土地の細分化が進み、大半のマプーチェ家族が貧困化して行く。その過程で、かつて各家族が大量に保有していた銀細工の品々は、家畜、農産物、製造品などと交換されたり、質屋に預けられるようになった。こうして既に1930年代には、マプーチェ銀細工品の大部分は、一般チリ人の質屋、商店主、収集家などの手に渡っていた、とアルドゥナテは指摘している [Aldunate: 14]。

今日テムコ市を初めとする都市の民芸品店で販売されている伝統的な銀製品には、多額のマージンが上乗せされ、一般のマプーチェの手の届かない価格で販売されている。結局のところ、都市部から避暑にきた上流層のチリ人や欧米からの旅行者などがこうした銀細工の品々の主な買い手となり、どんどん地域外に流出していつているのである。スミスの時代にはマプーチェ居住地域内に大量に流入していた銀細工が、今日では逆方向に移動しているのである。

一方で、共同体に住むマプーチェは貧困化し、しかも西欧系の装束の嗜好の影響を強く受けるようになったため、彼らの間での銀細工に対する需要は確実に減少している。

こうした状況下で、今世紀の中葉頃までは共同体のマプーチェの間に珍しくなかった銀細工師も、多くの地域で消滅していった。チョルチョル集落に近隣するロムルウエ共同体に住む67才のマチ、ロサは、かつて近隣に住んでいた銀細工師が今では見られなくなったと証言している [Barra, No.3]。また、クロリンダの住むコインコ共同体近辺でもこうした職人は皆無である。

一方、マチが治療儀礼を行うさいに重要な機能を果たすとされる楽器についても、同様の変化が起こっている。こうした民族楽器を作る職人も、共同体に住むマプーチェの間での需要の減少により姿を消していったのである。その結果、今日のマチの中にはこれらの楽器のいずれかを欠いている者が少なくない。

片面太鼓『クルトゥルン kultrun』(写真10)は、マチが神格や守護霊に祈禱を行ったり、治療儀礼の最中にトランス状態に入り、『神』やマチの守護霊に憑依されるために不可欠な楽器である。しかしクロリンダは、銀細工だけではなく、このクルトゥルンすらまだ入手できていない、と語っている。一方、ロムルウエ共同体の年輩マチ、ロサは、日本に住む筆者に対して、知り合いの職人に頼んで『ピフルカ pifülka』という木をくり抜いて作った1音笛(写真11)を作って欲しいと依頼している。また、やはり霊的疾病的治療に効力を発揮する楽器に鈴『カスカウィージャ kaskawilla』(写真12)がある。その鈴に関して、私が『マチトゥン』に参加することを許してくれたルマコ区ピリルマブ共同体の女性マチ、エウダリア・ライマンは、かつては珍しくなかった頑丈で強力な音を発する(治療効果の高い)『カスカウィージャ』を入手することが困難であることを嘆いている [Raimán]。

マチがその職能を十分に発揮するために重要だと考えられている銀細工や太鼓の入手の困難さに加え、クロリンダはもう一つ大きな問題を抱えていた。それは、彼女がマチになることに対する家族の反対である。

マチに『指名』された人物の家族の者が、彼(彼女)がマチになることに反対するという状況

は、何も最近になって発生したことではない。例えば今世紀初頭にかかれたプディ地区のあるマプーチェの証言によれば、『指名』された少女の父親が、自分の娘が本当の『神』ではなく『悪魔』に騙されているのではないかと疑い、娘がマチになることを拒否するケースについて語っている [Coña: 333]。また同じ証言は、娘がマチになるまでに父親が費やさねばならない多大な出費の問題に言及している [Ibid.: 337]。こうした経済的な理由が家族の反対の一因となる場合もあったに違いない。

しかし今日のマチの場合、これらのいわば「伝統的な理由」の他に、家族の反対をより頑固なものにするような新しい要因が発生している。

第一に、地域における医療状況の変化が挙げられる。病院や農村診療所の設置によって西欧近代医療の体系が都市部から農村へも拡張し、少なくとも一定の疾病治療に関して、共同体に住むマプーチェのマチへの依存度は減少した。例えば、化学合成薬品の投与や外科手術が有効な治療法となるような重度生理的疾患（結核、肺炎、胆石など）や、軽度の生理的疾患（風邪、熱、軽度の頭痛など）については、共同体の中にある農村診療所や、近隣の集落の病院に行くケースが増えている。こうした状況により、共同体に住むマプーチェの間でのマチに対する評価も、一昔前に比べると相対的に低下しているといえる。

一方、異教的要素に対してカトリック教以上に非寛容的な性格の強いプロテスタント派の牧師たちによる布教の進展にともない、共同体に住む一部のマプーチェの間では、マチを異教の権化として敵対視する傾向も見られるようになった。

このように、今日のマチにとって決して有利とはいえない状況のもと、クロリンダも夫や子供たちからマチになることに強行に反対されており、そうした家族との軋轢も彼女の悩みの種であった。

彼女は『父なる神』から義務を遂行するよう『巫病』を通じて催促されている。しかし一方では、実際にマチになるために必要な道具を手に入れる方法を見い出せず、また家族からはマチになることを反対されている。こうした板挟みの状態の中で、クロリンダは何年間も文字どおり「つらい思い」をしてきたのである。クララと話している最中に、気持ちが高揚して思わず号泣した彼女の姿が、私の脳裏には強く焼き付いている。

だからこそ、前の日の晩に銀細工師であるクララの到来を『夢』で知った彼女は、心臓の高鳴りで一晩中ろくに寝ることもできず、朝になるとクララのもとへ急いでやって来たのであった。そして、彼女の訪問は、銀細工の品々を「客」としてクララに注文するという極めて具体的・実践的な動機を伴っていたのである。

そしてクロリンダは銀細工の品々だけでなく、マチにとって最も重要な楽器である片面太鼓『クルトゥルン kultrun』すらまだ入手していないのだとも語った。だが、この問題もクララに出会うことで解決した。なぜならクララの知り合いの中に、やはりサンティアゴ市内に在住する若いマプーチェ男性で、伝統的なクルトゥルン製作の技術を修得した者がいたからである。私は

前回のチリ滞在時にこの男性とも知り合いになり、クララのためにクルトゥルンを作ったことも知っていた。

クララもこの男性も大都市サンティアゴに移住したマプーチェである。移民マプーチェの中には、共同体に住むマプーチェ以上にヨーロッパ的文化体系に完全に取り囲まれた状況の中で、マプーチェとしてのアイデンティティを喪失していく者が少なくない。しかし、クララやこのクルトゥルンを作る若者のように、マプーチェの伝統的な要素を意識的に保持していこうとする移民マプーチェのグループも少数ながら存在する。

結果として、クロリンダは『父なる神』の指令に従ってマチとなるために必要な伝統の品々を、まさにこうした二名の都市移民組マプーチェの手で作ってもらうことになったのである。

こうして銀細工も太鼓も入手するめどが立つと、クロリンダの顔によく笑みがこぼれた。長年の苦しみから解放されたかのように、サンティアゴに移民した息子の話などを陽気に語り始める。

クララは彼女にサンティアゴ市にある自宅の住所と電話番号を教え、クロリンダが上京してきた時に太鼓や銀細工品の話を進めること、そして正式にマチとなる準備が整った段階で、『ゲイクレウェン ngeikurewen』というマチのお披露目の儀礼の実施にも協力することを約束した。

こうして、自分が抱えていた大きな問題の一つが解決できるという確かな感触を得たクロリンダは、自分がマチになることに反対している家族も何とか説得するつもりだという決意をクララに伝え、別れを告げると軽い足どりで帰っていった。

6. 結び

クロリンダは、マチにとって伝統的に重要な手段である『夢』を通じて、自分が抱えていた難問の一つを極めて効果的な形で解決する糸口をつかんだ。もし、クロリンダが無事にイニシエーションの儀礼を終え、一人前のマチになれたとしたら、『夢』は疾病の診断や治療法などさまざまな情報を『神』が彼女に伝達する要素として、彼女の職業遂行に力を発揮していくに違いない。

だが、現代のマチが直面する問題は少なくない。

まず、クロリンダの例が示すように、今日マチが治療に必要とする道具や楽器などを作製する職人は激減している。

また、西欧近代の医療体系の整備や、プロテスタント派の布教活動の進展といった状況の中で、共同体に住むマプーチェの間でのマチに対する依存度、あるいは信頼度は以前と比べて相対的に低下している。こうした状況の下では、マチに『指名』された人物が、家族からマチになることを強硬に反対されるというケースも少なくないだろう。

一方、マチを任命する存在であると認識されている『父なる神』は、キリスト教的な「至高神」の含蓄を含みつつも、実際には『夢』を通じてマチにスペイン語の使用を禁じたり、『ウインカ

winka』と呼ばれる白人・混血系の一般チリ人の装束を放棄して伝統的な民族衣装を着用するよう『夢』を通じて命じる『マプーチェの民族神』という性格が強い。

それにも関わらず、共同体に住むマプーチェの生活の中には『ウィンカ』的な要素が洪水のように流れ込んで来ている。したがってマチに『指名』された人物本人にとっても、『神』の命じるような、純粋に民族的な伝統に則った生活を始める、あるいは維持することに対する心理的・物理的な困難は極めて大きい。

今世紀の初頭から中葉までに書かれた民族誌の情報によれば、マチに任命された若者たちは、場合によって家族に反対されたり、本人がマチになることを嫌ったりすることがあっても、そのほとんどが若いうちに正式なマチとして働き始めていた。

それに対し、私が直接対話することを得た6名の現役マチのうち4名が、『指名』されてから実際にマチとして働き始めるまでに20~40年以上もの時間を過ごし、その間病的状態に苦しむという経験をしている。また彼らのうち4名が、45才を過ぎた年齢になって始めて正式なマチになっている。こうしたマチの高年齢化の現象も、今日『神』に『指名』された人物が実際にマチになる前に経験する多くの困難を示唆している。

だがマチにとって不利な状況のみが存在するわけではない。

まず、先に触れたクララやクルトゥルン職人の若者のように、都市移民組のマプーチェの中には、共同体に住むマプーチェ以上に明確なアイデンティティーと伝統保持の意識を持ち、潜在的にマチを支援する可能性を秘めたグループが少数ながら存在する。

そして、白人・混血系住民『ウィンカ』の間でも、医療師としてのマチの効果を再評価する動きが起こっている。

第一に、マチの治療を受けるウィンカ患者たちの存在が挙げられる。近年に至るまでウィンカがマチの治療を受けることはほぼ皆無であった。しかし、マスメディアの発達、道路や交通手段の整備、マプーチェの都市移民などの生活条件の変化とともに、マチに関する一定の客観的な情報がウィンカ社会にも伝わるようになった。こうして、特に霊的疾患を初めとする難病にかかった白人や混血系の患者がマチのもとを訪れてその治療を受けるという現象が、今日ではすでに一般化している。その意味において、マチはウィンカ社会の中で、新しい機能を獲得しつつあるとすらいえるのである。

第二に、西欧系医療の実践や研究に関わる医者や看護師などの専門職の中にも、少数ながら先住民の伝統医療を再評価するグループが現れている。その代表的な例が、アラウカニア地域庁の中に設置された『アラウカニア医療課 Departamento de Salud Araucanía』である。同医療課は、医師、看護師、現地連絡官、マプーチェ出身の異文化調整官、文化人類学者など分野を越えたスタッフで構成され、西欧近代の医療体系を絶対視することなく、地域住民の健康状況を向上するため、薬草療法を初めとする伝統医療の中の有効な要素を積極的に導入して行こうという立場に立っている。

こうしたウィンカ社会におけるマチの再評価という現象が、今日のマチたちのアイデンティティーを補強するという方向に働いていることも事実である。そして、こうした変化が何らかの形で、本稿で述べたような今日の『マチ』たちが直面する困難の解消につながることになるかも知れない。

農村共同体に住むマプーチェの間では、医療師としてのマチの相対的地位は低下した。しかし、逆にウィンカ社会におけるその評価はむしろ上がりつつある。また、伝統の保持を訴える都市移民組のマプーチェの間でも、マチはマプーチェの伝統の象徴として高い存在価値を付与されている。

現代はマチにとって、『夢』を初めとする伝統的な要素を保持する一方で、新しい状況に対峙し、過去におけるような『共同体に住むマプーチェの医療師』という伝統的な枠組みを超えた『現代のマチ』としての新しいアイデンティティーを確立するための過渡期にあるといえるだろう。

注

(1) 現代マプーチェの宗教観の中で『夢』が占める役割については、Foerster (1993), pp.133-135. 参照。フォエルステルは『夢』が関わる状況として、神格が人間と交信する場合、マチが（神格によって）『指名』される場合、祖先霊が満足されるべき必要を（人間に）伝達する場合、という3つの場合を挙げている[Foerster: 133]。

(2) マプーチェの創造神話には、丘の守護霊である善良な『トレントレン』と海の霊である邪悪な『カイカイ』という2つの蛇が登場する。あるとき『カイカイ』は海の水位を上げて、地上に住むマプーチェを壊滅しようと試みた。それに対し、『トレントレン』は丘に登るようマプーチェに指示し、丘を隆起させ、または海面上に浮かせた。こうして『トレントレン』のおかげで救われた少数の者から、今日のマプーチェが派生したといわれている。ただし、こうした神話にちなむ『トレントレン』という名前の丘は、コインコ共同体だけではなく、各地に存在している。

(3) Mackenna, p.122. Guevara, p.18.

(4) 『父なる神 Chau Dios』とは、今日その大半がキリスト教徒を自認するマプーチェにとっては、一応キリスト教の言うところの『神』をさすものといえる。こうした『父なる神』という概念は、マプーチェが昔から保有していたものではなく、19世紀末の『平定』によってマプーチェの間で体系的な布教活動が可能となった後にマプーチェの間に普及したものと思われる。

ただこの『父なる神』は、『夢』を通じてマプーチェの医療師であるマチを『指名』したり、マチにマプーチェ語の保持や民族衣装の保持、あるいは伝統的な祈願儀礼の開催などを命じるといわれていることから、厳密にはキリスト教の「普遍神」そのものではなく、むしろ「マプーチェの民族神」といった性格が強い。

(5) Vivar, p.266.

(6) 17世紀初頭の反乱の際のマプーチェ戦士による銀細工の獲得に関する情報は、1674年に完成したロサレス神父の記録にも見られる。同記録によれば、1627年にイスパノクリオーリョ軍がインペリアル地区のマプーチェを攻撃した際、「多くの銀細工品」を戦利品の一部として押収したが、これはもともとこの地域のマプーチェが大反乱時にインペリアル市を陥落させた時に獲得していたものであった [Rosales, II, p.1124]。

(7) Smith, p.110. Treutler, p.333.

(8) 同様の指摘は、既にCooper (1947), p.751. に見られる。

参考資料

1. 現地聴き取り資料 (ミニ・ディスク録音)

Antinao, Clara, Santiago. No.1: 29 de julio de 1996.

Barra Cayul, Rosa, Comunidad Romulhue, Comuna de Cholchol. No.1: 25 de agosto de 1996. No.2: 26 de agosto de 1996. No.3: 27 de agosto de 1996.

Raimán, Eudalia. Comunidad Pililmapu, Comuna de Lumaco, 15 de agosto de 1996.

2. 文献

Aldunate del S., Carlos, "Reflexiones acerca de la platería mapuche", en *Cultura-Hombre-Sociedad*, Universidad Católica de Chile, Sede Temuco, Vol.1, Núm.1, Septiembre de 1984, pp.1-19.

Augusta, P. Felix de, *Lecturas Araucanas*, segunda edición, Imprenta y Editorial "San Francisco", Padre Las Casas, 1934, 339p.

Chiba, Izumi, "Un 'Machi-Nguillatun' en Chile Contemporáneo - modernismo y tradición - ", en *Estudios Hispánicos*, 20, Universidad de Estudios Extranjeros de Osaka, 1995, pp.195-234.

Coña, Pascual, *Testimonio de un cacique mapuche*, Pehuén, Santiago de Chile, 3^{ra} edición, 1984, 464p.

Cooper, John M., "The Araucanians", en Steward, J. (ed.), *Handbook of South American Indians*, Vol.2, Washington, pp.687-760.

Cruz, Luis de la, "Tratado importante para el conocimiento de los indios pehuenches según el orden de su vida", en *Revista Universitaria*, XXXVIII, Santiago de Chile, 1959, pp.29-59.

Domeyko, Ignacio, *Mis viajes*, Tomo II, Ediciones de la Universidad de Chile, Santiago de Chile, 1978, pp.627-1096.

Foerster, Rolf. G., *Introducción a la religiosidad mapuche*, Editorial Universitaria, Santiago de Chile, 1993, 184p.

González de Nájera, Alonso, *Desengaño y reparo de la guerra de Chile*, Colección de Historiadores de Chile y de documentos relativos a la historia nacional, Tomo XVI, Imprenta Ercilla, Santiago de Chile, 1889, 317p.

Guevara, Tomás, *Las últimas familias i costumbres araucanas*, Imprenta Litografía i Encuadernación "Barcelona", Santiago de Chile, 1913, 328p.

Mackenna, Vicuña, Benjamín, *La guerra a muerte*, Editorial Francisco de Aguirre, Buenos Aires, tercera edición, 1972, 925p.

Molina, J. Ignacio, "Compendio de la historia civil del Reino de Chile: escrito en italiano por el abate don Juan Ignacio Molina, segunda parte", en *Colección de Historiadores de Chile*, Tomo XXVI, Imprenta Elzeviriana, Santiago de Chile, 1901, pp.103-371.

Méndez Beltrán, Luz María, "La organización de los parlamentos de indios en el siglo XVIII", en Villalobos, Sergio y otros, *Relaciones Fronterizas en la Araucanía*, Santiago de Chile, Editorial Universitaria, 1982, pp.107-173.

Olivares, Miguel de, "Historia militar, civil y sagrada del Reino de Chile", en *Colección de Historiadores de Chile y de documentos relativos a la historia nacional*, tomo IV, Santiago de Chile, 1864, pp.1-402.

Rosales, Diego de, *Historia general del reino de Chile, Flandes Indiano*, 2 tomos, Editorial

Andrés Bello, Santiago de Chile, 1989, 1422p.

佐々木宏幹, 『シャーマニズム―エクスタシーと憑霊の文化―』, 中公新書, 1993年, 222頁。

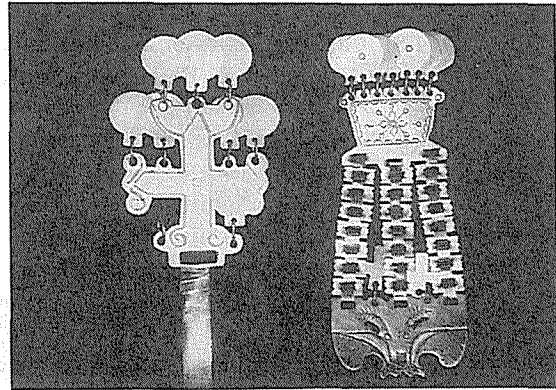
Valdivia, Luis de, *Arte y gramática general de la lengua que corre en todo el Reyno de Chile, con un Vocabulario, y Confessionario. Compuestos por el Padre Luys de Valdivia de la Compañia de Iesus en la Prouincia del Piru*, Lima, 1606.

Vivar, Jerónimo de, *Crónica de los reinos de Chile*, historia 16, Madrid, 1988, 366p.

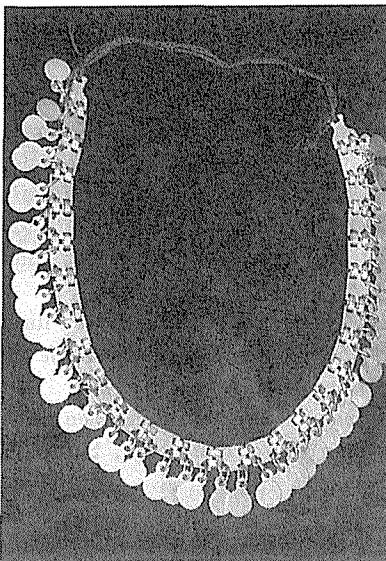
箭内匡, 『想起と反復―現代マプーチェ社会における文化的生成―』, 東京大学総合文化研究科博士学位論文, 1995年, 624頁。



1. 色とりどりのリボンを頭につけるクララ。頭部や胸部に自作の銀細工の品々が見える。



2. 左は女性が胸部中央につける銀細工『トラベラクーチャ』。右は左胸の上につける『スクル』。



3. 女性が首のまわりにかける銀細工の首飾り『クルカイ』。



4. 1646年にローマで出版されたイエズス会士オバージェ神父の記録の中で、挿し絵の一枚として描かれた『パリン』。



5. 1993年11月に首都サンティアゴ市で行われた『パリン』の試合にて。



6. 同上。都市移民マブーチェの参加者がスティックを打ち鳴らして氣勢を挙げる。



7. 参加者の男性たちは『パリン』のスティックや葦の棒を打ち鳴らし、悪霊を追い払う。



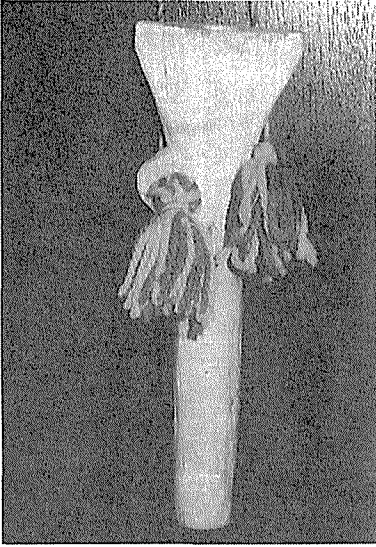
8. マチの霊を鼓舞するために、彼女の頭上で『パリン』のスティックと葦の棒を打ち鳴らす参加者。



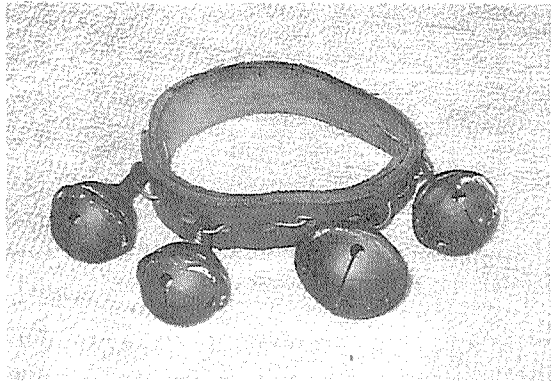
9. ロムルウエ共同体のマチ、ロサ・カユルの自宅前に立てられた『レウエ』。右下の地面の上に『パリン』のスティックが置かれている。



10. マチの治療儀礼に使われる片面太鼓『クルトウルン』。皮の上には赤色でマブーチェの宇宙観が描かれている。



11. 木製一音笛『ピフィルカ』。



12. 鈴『カスカウィージャ』。

(1997. 5.12 受理)